

朝堂院回廊・大極殿院回廊 の調査

—第160次

1 はじめに

調査の経緯 都城発掘調査部は、藤原宮中枢部の様相の解明を目的として、大極殿院、朝堂院の継続的な調査をおこなってきた。近年、大極殿院南門（第148次）、大極殿院東面回廊（第117次）、朝堂院回廊東北隅および東第一堂（第107次）、東第二堂（第120・125次）、東第三堂（第132次）、東第四堂（第142・144次）、東第六堂（第136次）、朝堂院回廊東南隅（第128次）、朝庭（第153次）の調査を実施し、主要な殿舎の配置と構造があきらかにされている。また、下層の調査により、宮の造営過程が窺われる遺構も検出している。

今回の調査地は、大極殿院回廊東南隅にあたり、大極殿院および朝堂院回廊の造営過程と構造を考える上で重要な場所といえる。主な調査目的は、大極殿院回廊の東南隅（大極殿院回廊と朝堂院回廊の接続部）の規模や構造、および回廊の造営過程や解体過程をあきらかにすること、下層の沼状遺構や溝の範囲を確定し藤原宮の造営過程をあきらかにすること、以上の2点である。調査区は、東西47m、南北25mの長方形に、大極殿院東面回廊推定地に東西25m、南北10mの張り出し部を設けた。また調査区内の4カ所に下層調査区を設定した。それぞれ西南調査区（23m×8m）、西北調査区（6m×3m）、東北調査区（3m×5m）および東南調査区（1.5m×9m）と呼ぶ。

調査面積は1425㎡、調査期間は2009年7月1日から2010年2月26日までである。



図112 第160次調査区全景（南から）

地形と基本層序 調査地は飛鳥川右岸の旧氾濫原にあり、概して南東から北西に向かう緩斜面に位置する。周辺の土地利用は、整備された史跡公園および耕作地である。調査区の北約3分の1は、史跡公園の整備地であり、南約3分の2は、近年まで水田耕作がおこなわれていた場所である。基本層序は、整備盛土（約40cm、北約3分の1のみ）、耕作土（5～15cm）、黄灰色土（いわゆる床土2層、約25cm）の順で、その下は大極殿院内庭部には礫混じり灰褐色砂質土、回廊部には黄褐色砂質土、朝庭部には礫混じり明灰色砂質土が続く。調査区東北部には、礫混じり灰褐色砂質土は存在せず、いわゆる床土直下に明灰褐色砂質土が分布する。これより下には、各時期の整地土があり、青灰色粘土・黄灰色粘土の地山となる。遺構検出は黄灰色土直下においておこなった。（山本 崇）

整地 整地は3段階のものを確認した。古い順に整地層1・2・3と呼ぶ。整地層1は、褐灰色粘質土（20～40cm）で、地山直上の整地土である。この整地土上で、先行条坊側溝と推定される溝や運河SD1901Aが掘り込まれ、藤原宮造営前の整地と考えられる。第148次調査で確認したIV層（『紀要2008』）、および第153次調査で確認した第一次整地土（『紀要2009』）にあたる。整地層2は、褐色砂質土・黄褐色砂質土（5～30cm）で、調査区内の北3分の2に分布し、調査区の北へと広がる。藤原宮造営期に大極殿院南門や回廊を建設するにあたり、再度広範におこなわれた整地とみられ、第148次調査で確認したIII層にあたる。整地層3は、回廊により分けられた3カ所の広場に分布する。大極殿院内庭部は、黄灰色細砂・橙灰色砂質土（10～30cm）、朝堂院朝庭部は、黄灰色細砂・橙灰色砂質土（20～40cm）、調査区東北部は明灰褐色砂質土（約20cm）である。広場造成にあたりおこなわれた整地とみられ、朝堂院朝庭部は第153次調査で確認した第二次整地土にあたる。（高橋知奈津）

2 日本古文化研究所トレンチの再発掘

昭和14年の調査 調査地は、昭和14年に日本古文化研究所によりトレンチ調査（以下、古文化研トレンチと略称する）がおこなわれ、その結果、回廊礎石の位置は概ね推定されている（日本古文化研究所『藤原宮趾伝説地高殿の調査二』1941）。今回の調査では、いわゆる床土の最下層で古文化研トレンチを検出し、記録を作成した（図113・114）。

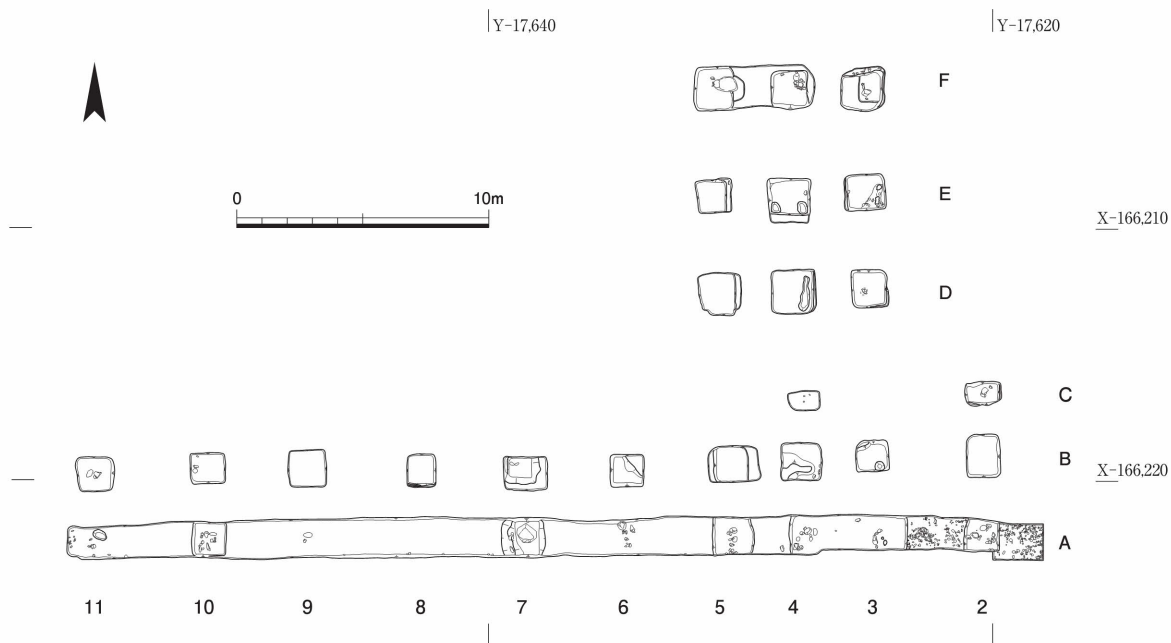


図113 古文化研トレンチ遺構図 1:300

検出面より上がそれ以後の耕作にともなう床土、検出面より下の黄灰色土（いわゆる床土約5cm）は、昭和14年の調査以前の水田耕作にともない形成された土壌である。
古文化研調査の概要 A列は布掘り状のトレンチが設定され、礎石の周囲ないし根石の範囲のみやや深く掘り下げられる。これに対し、B列とD～F列は、柱穴ごとに壺掘り状に掘り下げられていた。一辺1～2m、深さ20～35cm残存。任意の一辺ないし二辺が段状に浅くなっている例がB5・D5などに認められ、壺掘りトレンチの多くが段掘りされていることがわかる。旧耕作地の畦境にあたる南面回廊北側柱列（C列）は、C2・C4を

除き調査がおよんでいない。なお、古文化研トレンチのうち、E3・E4のトレンチは、礎石抜取穴・据付掘方を完全に破壊している。

古文化研トレンチの埋め戻し土から、大量の瓦片が出土した。いずれも、後述する瓦溜SX10912・SX10913に由来するものと推測される。調査段階に出土した遺物のうち、特筆されるもののみを取り上げ、残りの遺物はトレンチに埋め戻したのであろう。戦前の調査方法が窺われる資料ともいえる。（山本）

3 検出遺構

検出した遺構は、大きく藤原宮造営前、藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮解体期、藤原宮廃絶後に区分できる。以下、年代順に各時期の遺構について述べる。

藤原宮造営前の遺構

整地層1から掘り込む4条の東西溝を検出した。

東西溝SD10871 東北・西北調査区で検出した素掘溝。東北調査区で約4.5m分、西北調査区で約6m分を確認した。幅約1.2m以上、深さ約80cm。SD10873と重複し、それより古い。また西北調査区で後述のSD10801Bがほぼ直交する。埋土は、下から暗灰褐色粘土（約30cm）、暗灰色砂質土（約40cm）で、飛鳥Ⅳの土器が出土した。

東西溝SD10872 東壁および南北畦壁の断面観察により確認した素掘溝。幅約1.7m、深さ約30cm。SD10874と重複し、それより古い。

東西溝SD10873 東北・西北調査区で検出した素掘溝。東北調査区で約4.5m分、西北調査区で約6m分を確認し

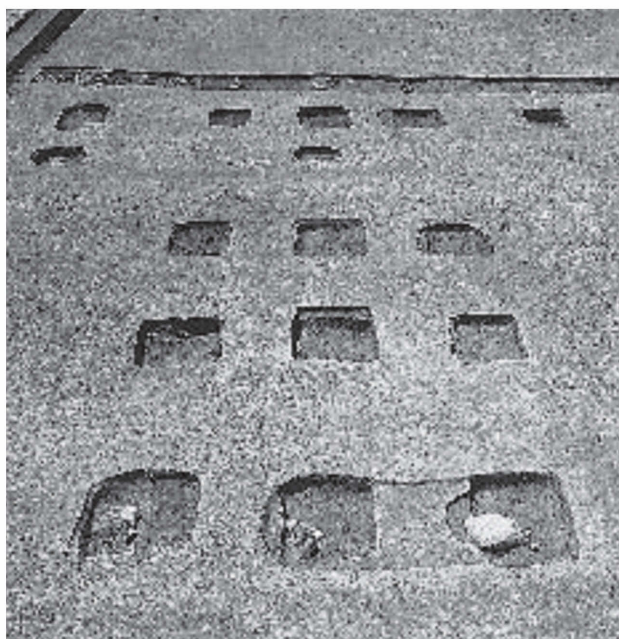


図114 古文化研トレンチ検出状況（2～6列、北から）

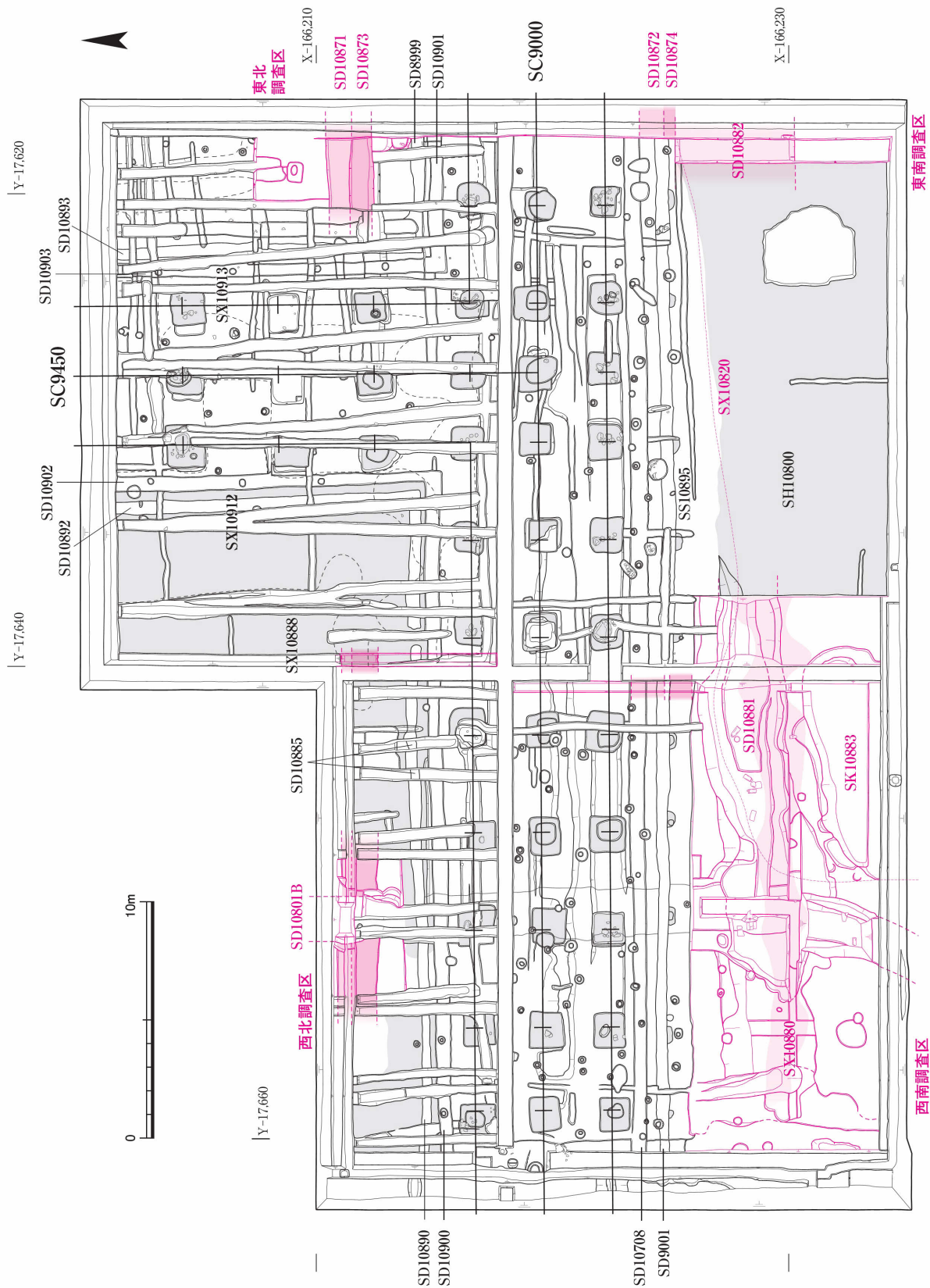


図115 第160次調査遺構図 1 : 250

た。幅約1.3m、深さ40～70cm。埋土は、下から木屑を多く含む暗褐色粘土（約15cm）、褐色砂質土（20～30cm）である。SD10871と重複し、それより新しい。西北調査区で後述のSD10801Bがほぼ直交する。

東西溝SD10874 東壁および中央畦壁の断面観察により確認した素掘溝。幅1.3m以上、深さ約40cm。後述のSX10820と重複し、それより古い。

以上、SD10871・SD10872は、第107・148次調査で確認した先々行四条大路北側溝・南側溝、SD10873・SD10874は先行四条大路北側溝・南側溝と考えられる。ただし、先行四条大路南側溝は、後述のSX10820やSD10881により壊され、遺構が残存しない可能性が残る。

藤原宮造営期の遺構

沼状遺構SX10820 調査区南壁、東壁、南北畦断面で確認した沼状に広がる遺構。第153次で検出した遺構の北辺にあたる。東西約30m分、南北約10m分を確認し、第153次調査の成果とあわせて、東西38m以上、南北42m以上の規模におよぶ。埋土は下から、暗青灰色シルト・暗青灰色粘土（40cm強）、木屑を含む暗灰色粘質土（10～40cm）である。後述の東西大溝SD10881・東西溝SD10882・大土坑SK10883と重複し、これらより古い遺構である。本調査区東方の第107次調査で確認した沼状地形SX9091（『紀要2001』）と同一遺構の可能性がある。

南北大溝SD10801B 調査区西部で検出した幅約2m、深さ約1mの素掘溝。25m分を確認し、調査区北へさらに延びる。第153次調査において確認した斜行溝SD10801Bの延長部にあたる。整地層2を掘り込む遺構であるが、西南調査区の8m分は整地層1で検出した。埋土は下から、木屑の混じる暗青灰色粘質土（40～50cm）、橙褐色粗砂・褐色砂質土（15cm～50cm）である。

SD10801Bは、大極殿院南門SB10700（以下、南門）の建設を契機に掘削された溝と推定されていた（『紀要2009』）。今回検出した延長部は南門を迂回するように掘削されていることから、その蓋然性が高まった。またSD10801Bの回廊建設地以北は、先行して埋め立てられる。その後、後述の東西大溝SD10881が掘削されて、これに接続する。回廊建設地を南北に横切っていたSD10801Bの進路を、回廊建設にあたり、東へ付け替えたものとみられる。

SD10801Bのうち、先行して埋め立てられた部分の断

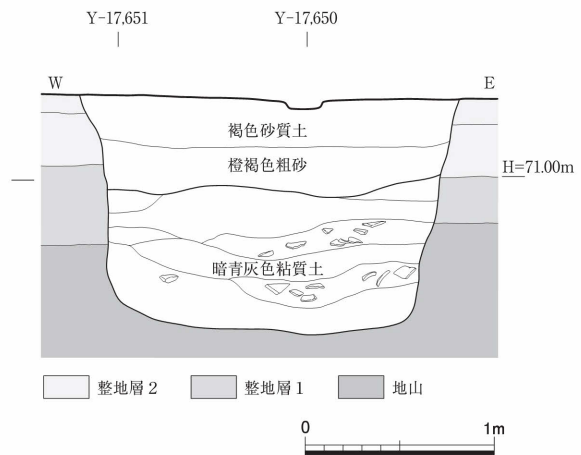


図116 SD10801B断面図 1:40 (X-166,226付近)

割調査で、暗青灰色粘質土中に瓦の小片を多く含む層を2層確認した（図116）。埋め立ての際に廃棄した瓦と考えられる。また、橙褐色粗砂・褐色砂質土は、先行して埋め立てられたSD10801Bと、付け替え後のSD10801B・SD10881の上層におよぶ埋土である。これらの溝は最終的に一連で埋め立て、その後、回廊基壇を築成したものと考えられる。

東西大溝SD10881 西南調査区において検出した素掘溝。幅3～5m、深さ約1m。長さ約17m分を確認し、西南調査区からさらに東に延びる。埋土は下から、暗青灰色粘土（約40cm）、木屑層（5～15cm）、木屑が混じる暗青灰色砂質土（約40cm）、橙褐色粗砂・褐色砂質土（約15cm、西から約6.5m）である。整地層2から掘り込む。SD10801Bの南6m分と埋土が一連であり、SD10801Bの回廊建設地以北を埋め立てた後に掘削され、東折する溝として機能したとみられる。屈曲部の内側には厚く木屑が堆積する。

東西溝SD10882 東南調査区において検出した幅3m、深さ約15cmの浅い溝。整地層2から掘り込む。SX10820と重複し、それより新しい。埋土は、下から黒色粘質土ベースの木屑層（約5cm）、暗灰色粗砂（約10cm）である。SD10881の延長部の可能性がある。

大土坑SK10883 西南調査区で検出した東西11m、南北4m以上、深さ約25cmの土坑。埋土は暗褐色粘質土で瓦片や木屑が出土した。西肩はSX10820の西肩を踏襲する。SD10801BおよびSD10881とは1mほどの距離において掘削され、これらの溝と並存する遺構であると考えられる。

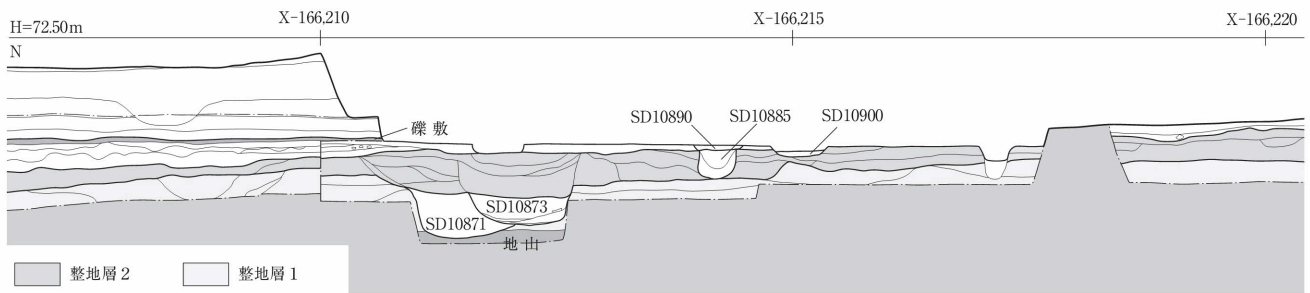


図117 調査区南北畦土層図 1:80 (Y-17,640付近)

瓦溜SX10880 西南調査区の回廊SC9000南側柱筋から7mほど南で、帯状に瓦が堆積していた(図119)。幅1.5mで東西22m分を確認し、西南調査区のさらに東に続く。朝庭部の整地層3における橙灰色砂質土の下、黄灰色細砂上で検出した。直下にあるSD10881の埋土上面に生じた幅3m、深さ20cmほどの窪地の底に瓦が溜まるような状況で検出された。朝庭部の整地の際に、地盤が軟弱となったSD10881上層を固めるために廃棄した可能性がある。屋根に葺いた形跡のない瓦や、屋根での使用に適さない歪んだ瓦が含まれ、造営に際し不要な瓦を廃棄したものと推定される。

東西溝SD10885 南北畦などの断面観察および耕作溝底で確認した、SD10890直下にある素掘溝。幅40cm、深さ30cm。第117次調査で検出されたSD9461などに類する造営期の排水溝の可能性ある(『紀要2003』)。(高橋)

藤原宮期の遺構

南面回廊SC9000 礎石の抜取穴および据付堀方を33基(うち9基はSC9450と重複)、南北3列、東西10間分検出し

た。礎石据付堀方は一辺約1.5mの隅丸方形で、その多くは礎石が抜き取られ根石だけが残る深さ5~15cmの浅い穴である。南側柱列西から6基目に礎石が残存するが、原位置は保っていない。柱間は、桁行約4.2m(14尺)、梁行約3.0m(10尺)である。ただし、調査区西端の1間目は、桁行が約3.6m(12尺)とやや狭く、大極殿院東面回廊SC9450と接続する2間分については、桁行・梁行ともに約3.0m(10尺)となる。複廊形式の回廊と推測され、大極殿院南面回廊かつ朝堂院北面回廊にあたる。調査区外西で大極殿院南門に接続する。

棟通り付近は黄褐色粘質土の基壇土の残りがよく、調査区内の西端部分で、10cm程度の高まりとして残存する。

なお、北側柱列の礎石抜取穴のうち、西から5基目、10基目の抜取穴は、いわゆる床土の最下層にあたる黄灰色土で確認でき、後者は後述する瓦溜SX10912を明瞭に壊していた。少なくともこの2穴については、礎石の抜き取り時期が、藤原宮廃絶期以後に降ることがわかる。

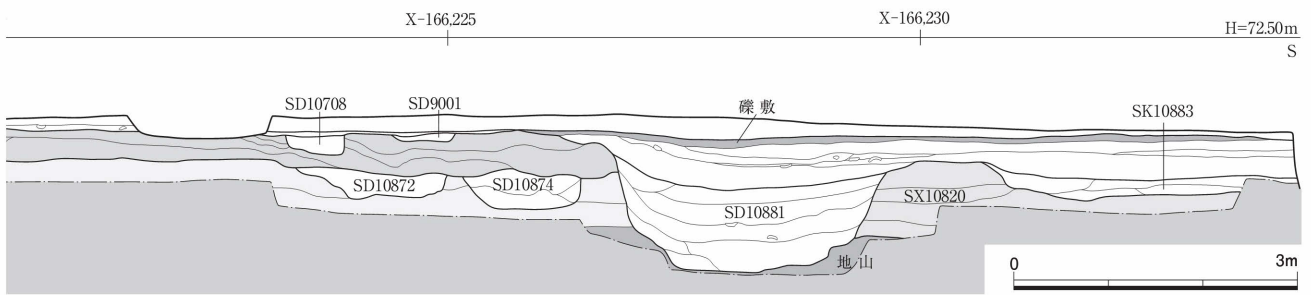
足場穴SS10895 SD9001と重複しそれに先行する10基の



図118 SD10881・SK10883検出状況(東から)



図119 SX10880検出状況(東から)



小柱穴群。直径約70cm、深さ約30cm。SC9000造営時の足場穴と推測される。

溝状遺構SD8999 調査区東端で、SC9000の北側柱筋から約2.5m外側にある、砂が薄く堆積する遺構。幅40～50cm。深さ約5cm残存。SD10893と接続する。調査区外東に延び、第107次調査で検出した溝とつながると推測される。SC9000の北雨落溝にあたると思われる。

溝状遺構SD10890 回廊西半部で検出した、SD8999と同規模の遺構。SD10892と接続する。SC9000の北雨落溝にあたると思われる。第148次調査でSD8999とした溝に連続するが、第107次調査で検出した同遺構番号の溝とは連続しないため、新たな番号を付した。

溝状遺構SD9001 SC9000の南側柱筋から約2.5m外側にある、砂が薄く堆積する浅い遺構。幅40～50cm、深さ約10cm残存。調査区外東西に延びる。SC9000の南雨落溝にあたると思われる。

東面回廊SC9450 礎石の抜取穴および据付掘方を18基（うち9基はSC9000と重複）、東西3列、南北5間分検出した。ただし、うち2基は古文化研トレンチにより完掘されている。礎石据付掘方は一辺約1.5mの隅丸方形で、SC9000と同規模。柱間は、桁行約4.2m(14尺)、梁行約3.0m(10尺)である。ただし、SC9000と接続する2間分については、桁行・梁行ともに約3.0m(10尺)となる。西側柱列もっとも北の柱穴に礎石が残存しており、原位置を保っていると推測される。SC9000と同規模の複廊形式の回廊と推測され、大極殿院東面回廊にあたる。調査区外北へ延びる。

溝状遺構SD10892 SC9450の西側柱筋から約2.5m外側にある、砂が薄く堆積する浅い遺構。幅40～50cm、深さ約7cm残存。調査区外北に延びる。SC9450の西雨落溝にあたると思われる。

溝状遺構SD10893 SC9450の東側柱筋から約2.5m外側にある、砂が薄く堆積する遺構。幅40～50cm、深さ約7cm残存。調査区外北に延びる。SC9450の東雨落溝にあたると思われる。

礎敷SX10888 大極殿院回廊内側で検出した。灰褐色砂質土のベースに小礎（径5cm程度）が若干残存していた。大極殿院内庭の礎敷と推測される。

礎敷SH10800 大極殿院南面回廊の南側で検出した。径

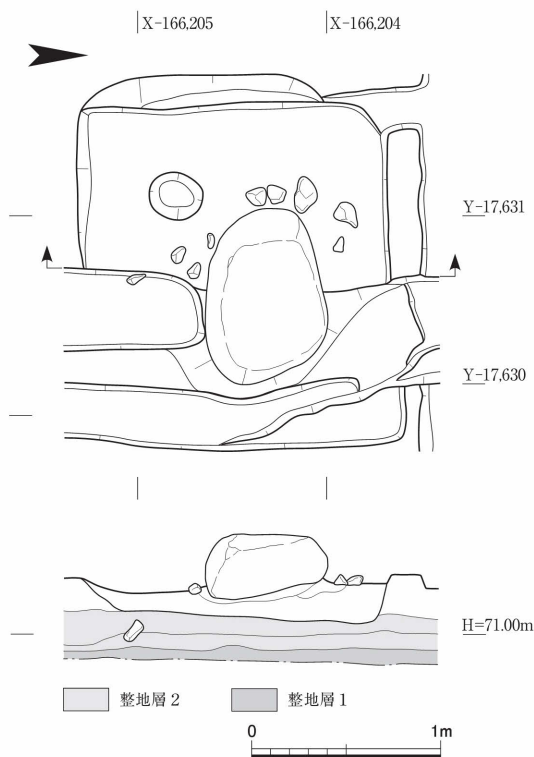


図120 SC9450礎石据付掘方平面・断面図 1:40



図121 SC9450礎石残存状況（東から）

5～10cmの礫が認められ、本来は全面に礫が敷かれたものと考えられるが、礫の残存状況はよくない。朝堂院朝庭にあたる。

藤原宮解体期の遺構

東西溝SD10708 SC9000の南側柱筋から約1.2m外側にある素掘りの溝。幅50～60cm、深さ約20cm。SC9000南側の基壇外装抜取溝と考えられる。

東西溝SD10900 SC9000の北側柱筋から約1.2m外側にある素掘りの溝。幅50～60cm、深さ約20cm。SD10902と接続する。SC9000北側の基壇外装抜取溝と考えられる。

東西溝SD10901 SC9000の北側柱筋から約1.2m外側にある素掘りの溝。幅50～60cm、深さ約20cm。SD10903と接続する。調査区外東に延びる。SC9000北側の基壇外装抜取溝と考えられる。

南北溝SD10902 SC9450の西側柱筋から約1.2m外側にある素掘りの溝。幅50～60cm、深さ約15cm。SD10900と接続する。調査区外北に延びる。第117次調査で検出したSD9460とつながると推測され、SC9450西側の基壇外装抜取溝と考えられる。

南北溝SD10903 SC9450の東側柱筋から約1.2m外側にある素掘りの溝。幅50～60cm、深さ約15cm。SD10901と接続する。調査区外北に延びる。第117次調査で検出したSD9455とつながると推測され、SC9450東側の基壇外装抜取溝と考えられる。

以上の基壇外装抜取溝と推測される溝の心々間距離から、回廊の基壇幅は約8.4m(28尺)と推測される。

柱穴群SX10905 SD10708・SD10900・SD10901・

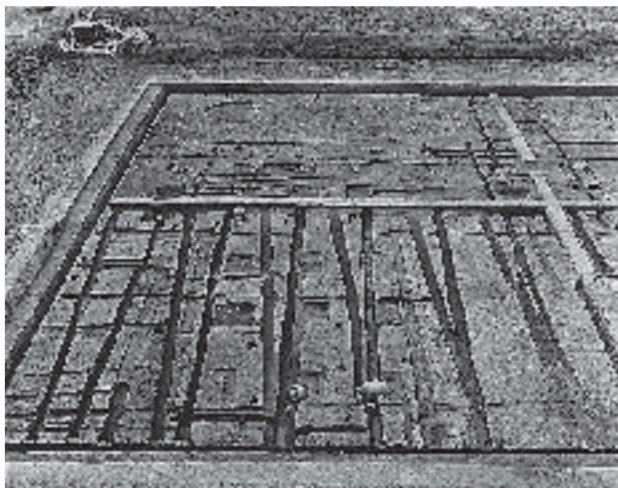


図122 SC9450検出状況(北から)

SD10902・SD10903と重複関係があり、それらを掘り込む小柱穴群。SC9000およびSC9450解体時の足場穴と推測される。回廊上にも同様の小柱穴が確認される。

瓦溜SX10912 SC9450の西側で検出した。SD10902以西に分布し、東西約5m×南北約15m。調査区外北に延びる。SD10892直上付近にもっとも厚く堆積する。

瓦溜SX10913 SC9450の東側で検出した。SD10903以東に分布し、東西約6m×南北約15m。調査区外北に延びる。SD10893直上付近にもっとも厚く堆積する。

藤原宮廃絶後の遺構

南北溝群 調査区北半では、ほぼ11～12m間隔で南北溝群を検出した。幅約50cm、深さ25～40cm。溝底の標高は北が低い。ほぼ正方位のものとして西に振れる偏向溝が対になって掘られており、重複関係が認められる溝では、いずれも偏向溝が先行する。いわゆる耕作溝と理解するが、地形ないし飛鳥川流路に沿って偏向する溝から正方位の溝へと地割の変遷を示す可能性がある。(山本)

4 出土遺物

木製品 SD10801Bから籌木が2点、SD10881から齋串の破片が1点出土した。またSD10881からはプラスチックコンテナ10箱分もの加工木が出土したが、いずれも建築部材等を加工する際に生じた小片である。このほか、SX10820から刳物容器の破片が1点出土した。

金属製品等 遺物包含層から和同開珎が1点、棒状の銅製品が1点、円盤状鉄製品が1点、鉄釘が1点出土した。ほかにも銭種不明の銅銭片が2点ある。石製品では滑石製の管玉が1点、サヌカイト剥片が2点出土した。また、SD10880からは獣骨がコンテナ1箱分、モモの核が14点出土した。(豊島直博/文化庁)

瓦類 第160次調査では、プラスチックコンテナ約500箱もの大量の瓦類が出土した。出土した瓦は、軒丸瓦8型式18種203点、軒平瓦7型式15種274点、面戸瓦78点、熨斗瓦53点、隅切瓦3点、鬼瓦2点、隅木蓋瓦2点、谷樋瓦1点、丸瓦13,915点(1,283kg)、平瓦65,293点(4,743kg)である。ここでは軒瓦を中心に報告をおこなうこととし、宮廃絶後に廃棄された軒瓦を表6、宮造営期の遺構や朝庭部整地土層から出土した瓦を表7に示した。

宮廃絶後に廃棄された軒瓦に関しては、軒丸瓦は6273Bと6275Aが、軒平瓦は6641E・Fと6643Cが多い(表6)。

これらの軒瓦が大極殿院回廊所用瓦であった可能性が高い。大極殿院回廊ではこれまでの調査から、複数の型式が使用されたと考えられている（『紀要2003・2008・2009』）。今回出土したなかでは、6275A - 6643Cは、大極殿院南門・南面回廊の組み合わせであり（『紀要2008・2009』）、6273B - 6641Eは大極殿院東・西・北門所用、6641Fは大極殿院東面回廊に多い（『紀要2003』）。今回の調査区における分布状況を見ると、6273Bは大極殿院回廊東南隅以北から、6641Fは回廊東南隅周辺から出土する傾向にあるものの、6275A、6641E、6643Cは調査区全域から出土しており分布の偏りはみられない。したがって、軒瓦の分布状況から、大極殿院回廊の軒瓦がこれまでの見解通り、場所ごとに特定の軒瓦型式で統一されていたのか、それともいくつかの軒瓦型式が混用されていたのかを判断することは今回の調査からは困難である。

また、大極殿院回廊所用軒瓦の特徴に関しては、6273Bは瓦範の摩耗が少ないことに加え、瓦当側縁上半部が盛り上がるIグループのものが多く、大極殿所用瓦との共通性が強い（石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010）。6275Aも1・2段階が中心で、6643CもIグループが多数を占め、第148・153次調査出土6275A - 6643Cと共通点が見いだせる。よって、大極殿院回廊所用軒瓦は、少なくとも6273BのIグループを含まない朝堂所用軒瓦や、6275Aの3段階と6643CのIIグループが中心のSB530所用軒瓦より古い様相を示す。

次に造営期の遺構および宮整地層から出土した瓦について述べる（表7）。造営期の遺構からは多様な軒瓦および道具瓦が出土した。特に東西大溝SD10881からの出土が多く、なかには使用した痕跡のない完形品の瓦も含

表6 宮廃絶後に廃棄された軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6231	A	1	6275	A	33
6232	A	1		B	3
6233	A	1		C	2
	B	5		D	9
	Ba	2		I	2
	不明	1	6278	B	1
6273	A	8	6279	Aa	4
	B	25		Ab	11
	C	7		B	6
	不明	8	6281	A	7
6274	A	1		B	5
	Ab	5	不明		32
計			計		
			180		
			199		

まれる。軒瓦は、軒丸瓦では6274Abや6279B、軒平瓦では6643A・CのIグループ、6647Caなど、主に藤原宮北面大垣で出土する型式が確認できるいっぽうで、軒丸瓦6273・6281型式、軒平瓦6641型式などの大極殿および朝堂院所用軒瓦は含まない。6273・6281型式および6641型式は、運河SD1901A（『藤原概報8』）や斜行溝SD10801A・SD10801B（『紀要2009』）からも出土していない。このことから6273・6281・6641型式は、出土状況を見る限りは、表7にあげたような造営期の遺構から出土する軒瓦より後出する可能性がある。

また、瓦溜SX10880からは6643Aが22点出土したが、これらはすべて瓦当側縁部の小片である。脇区に無文部を残すことと胎土の特徴から、すべて6643AbのIグループ以前の所産とみられる。

朝庭部整地土からは、熨斗瓦片21点、および6561Aの顎部片ばかりが24点出土した。6561Aのほかにも6275Cや6281Bなど、造営期の遺構からは出土しない軒瓦がみられる。6281Bは朝堂所用瓦であり、6275Cや6561Aは朝堂などから一定量出土している。このことは、造営期の遺構が機能していた時期と朝庭を整地する段階とでは一定の時期差があることを示していると考えられる。

最後に今回の調査で出土した瓦で、特徴的なものをあげる（図123）。1はSD10881出土の軒丸瓦6275Eである。丸瓦部が残存するものの、玉縁部は欠損している。

表7 宮造営期遺構および朝庭部整地土出土軒瓦集計表

	SX10880	SD10801B	SD10881	SK10883	朝庭部整地土	計	
軒丸瓦	6233Ab		2			2	
	6233Ba		1			1	
	6274A				1	1	
	6274Aa			1		1	
	6274Ab			1		1	
	6275A		1	3	2	6	
	6275C				1	1	
	6275E			1		1	
	6279Aa	1				1	
	6279Ab			1		1	
	6279B	1		3		4	
軒平瓦	6281B				1	1	
	不明				2	2	
	6561A				24	24	
	6643A	22			1	23	
	6643Aa			2		2	
	6643Ab	2				2	
	6643C		1	8	1	10	
	6647Ca			1		1	
	不明	4	2	5	2	13	
	道具瓦	熨斗瓦		7	7		35
		面戸瓦		6	7	1	14
隅切瓦				1		1	
谷樋瓦		1				1	

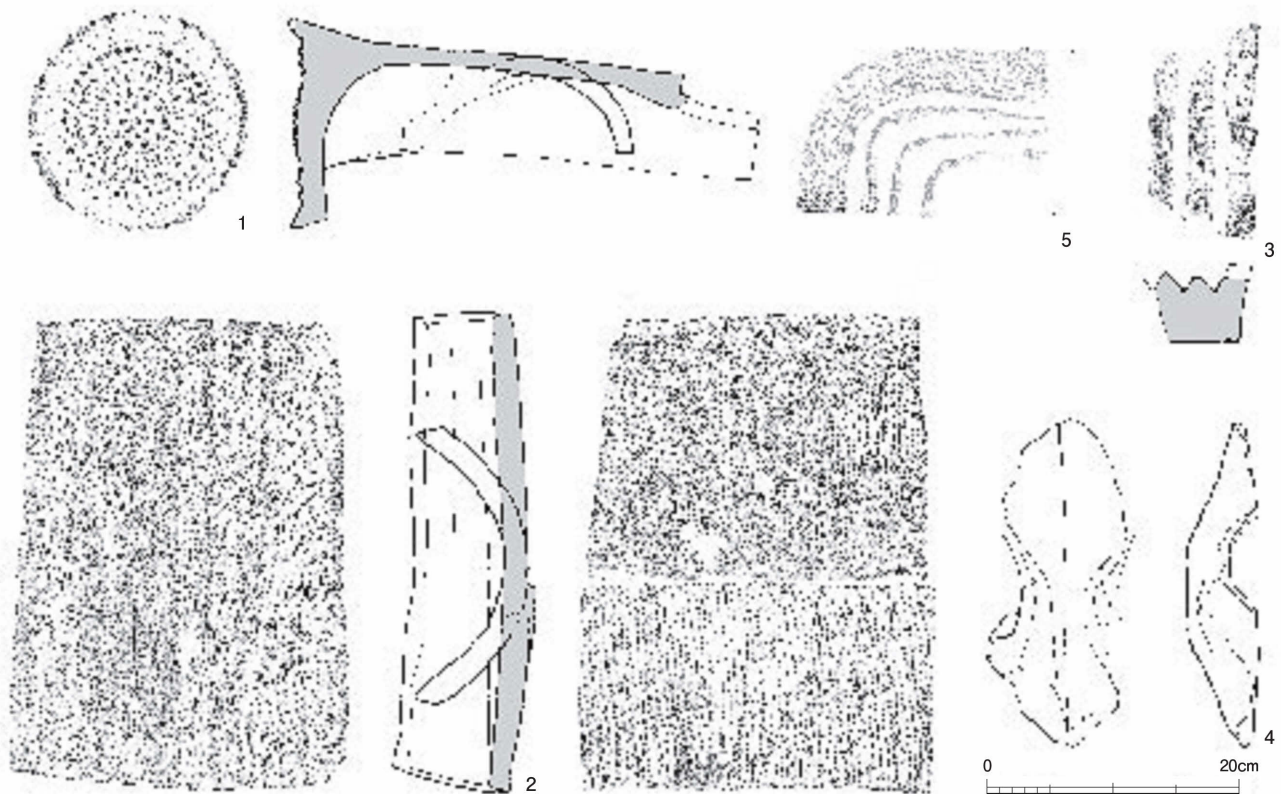


図123 第160次調査出土瓦類 1:6

6275Eは日高山瓦窯産と考えられているが、1には日高山瓦窯産6275Eとは異なる点がいくつかある。まず瓦当部と丸瓦部とでは胎土が異なり、丸瓦部には精良な胎土を、瓦当部には砂粒の多い粗い胎土を用いる点である。また、瓦当外縁端部には圏線状の段がないこと、丸瓦広端隅を切り欠き、凹凸面に斜格子状の刻みをいれて丸瓦を接合すること、さらに丸瓦の取り付け位置も日高山瓦窯産6275Eとは異なる。1の外縁端部に圏線状の段がないのは、範自体を彫り直して段を削り取り、三角縁に改範しているためである。したがって1は日高山瓦窯産よりは後出する。丸瓦部と瓦当部とで胎土が異なることに関しては、同様の事例は6279Bにもあるが、6279Bは高台・峰寺瓦窯産である。1の瓦当部に用いた胎土は6279Bのそれとは類似するものの、丸瓦部の胎土には高台・峰寺瓦窯特有のクサリ礫は含まない。また丸瓦両面に刻みを入れる瓦当接合方法も高台・峰寺瓦窯産6279Bとは異なる。したがって、6275Eは製作技法や胎土の違いから、範自体が日高山瓦窯から別の瓦窯へ移動したと考えられるが、その移動先は現時点では不明である。

2はSD10881出土の谷樋瓦。谷樋瓦とは屋根の入隅部に集中する雨水を流すため、樋として谷部に設置するも

のである。同様のものは第107次調査などでも出土している（『紀要2001』）。広端から狭端へ向かって約15cmの所に粘土紐を貼り付け緩やかな段を作り出す。顎面には縦縄叩きが残る。焼成は堅緻で灰色。2は歪みが激しいため、未使用のまま廃棄されたと考えられる。

3は重弧文鬼瓦の破片。古文化研トレンチA列より出土し、第153次調査出土資料と接合した。重弧文鬼瓦は第24次藤原宮東面大垣の調査からも出土しているが（『藤原概報9』）、それとは弧線の幅や胎土・焼成が異なる。焼成は軟質で、灰色と灰白色とがマーブル状に混じる特徴的な色調をなす。

4は鬼瓦を棟に固定するために鬼瓦の裏面に取り付ける半環状把手である。第24次調査出土の鬼瓦裏面にも同様の把手があるが、形状は若干異なる。焼成や胎土の特徴は3と同じで、重弧文鬼瓦に取り付くと思われる。

5は重弧文の隅木蓋瓦外縁部の破片。重弧は削り出して作出する。同様の隅木蓋瓦は第55次藤原宮東方官衙・内裏東外郭地域の調査でも出土している（『藤原概報18』）。焼成は軟質で、胎土にクサリ礫を多く含む。色調は灰黄色。なお、今回の調査区からは隅木蓋の体部片と思われるものも出土した。（石田由紀子）

土器 第160次調査では整理木箱37箱分の土器が出土した。古代の土師器・須恵器を中心に、他に瓦器、陶磁器、埴輪などがある。礫敷層直上の黄灰色土からの出土がもっとも多く、遺構ともなうものはあまり多くはない。SD10881からは、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器杯Aが、SK10883からは須恵器杯A・杯Bが出土している。ここでは比較的まとまった資料が出土し、先々行四条大路北側溝と考えられるSD10871の土器を報告する（図124）。

SD10871からは土師器杯B・杯C・高杯A・鉢・甕・カマド、須恵器杯・高杯・甕などが出土している。須恵器で図化可能なものはなく、土師器のみを図示した。1は杯CⅢ。口径10.8cm。底部外面には軽いケズリが入る。2は杯CⅡ。口径11.7cm、器高3.5cmで、径高指数は29.9。底部外面はナデ。3は杯CⅠ。口径17.0cm、器高4.4cmで、径高指数は25.9。外面調整はa0手法。4は杯B。高い高台を有し、内面には放射暗文を施す。5は把手付鉢。口径は29.5cm、器高は13.5cmで、口縁の一部を曲げ、片口とする。片口部から左右90度の位置に把手が2カ所

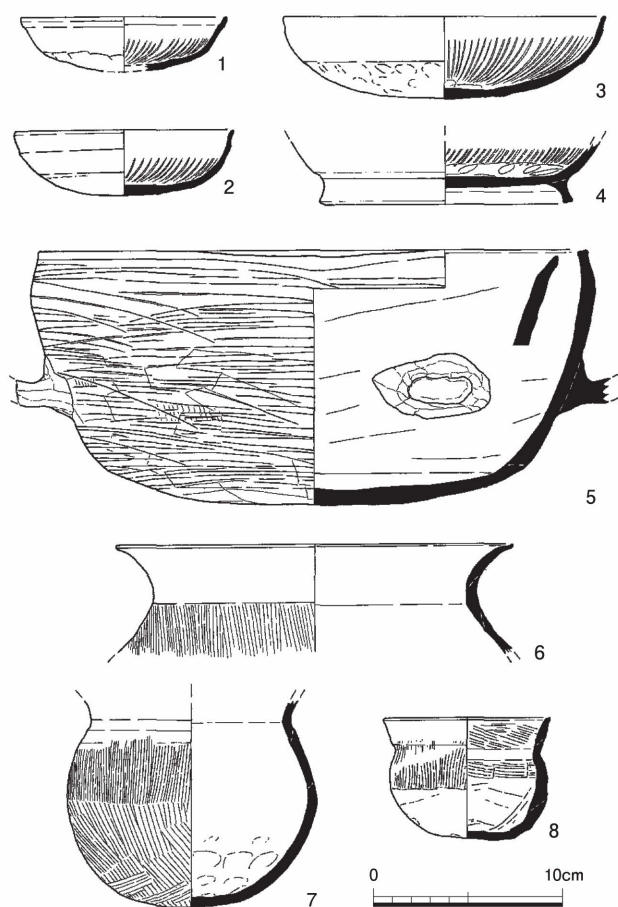


図124 SD10871出土土師器 1:4

つく。底部～体部下半の外面調整はケズリで、体部の一部にはケズリに先行するハケ目が見える。口縁部～体部下半の外面には丁寧なミガキが入る。6は甕で、口縁端部を丸くおさめる。7は甕A。体部外面を縦方向のハケ目で調整したのち、底部～体部下半に目の粗いハケ目を施し仕上げる。内面はナデを施す。大和型。8は小型甕。底部外面は不調整で指オサエの凹凸が残る。

これらの出土資料は、杯B・杯Cの形態や調整などの特徴より飛鳥Ⅳにあたる。（若杉智宏）

5 藤原宮造営期の遺構変遷

ここでは、第148・153次調査の成果とあわせて、大極殿院南門SB10700周辺の藤原宮造営期の遺構変遷をまとめ、造営過程について検討する。

まず、藤原宮造営前に周辺一帯を整地し（整地層1）、先々行朱雀大路・先々行四条大路側溝を掘削する段階、これらを埋め立てた後に、先行朱雀大路・先行四条大路側溝を掘削する段階がある。

①運河SD1901Aおよび斜行溝SD10801Aを掘削する。SD10801Aの東端が沼状遺構SX10820の手前で収束することから、SX10820もこの時に掘削された可能性がある。SD1901Aは、藤原宮の中軸やや東を南北に貫流する運河である。現状で南は大極殿院南門の南方（第153次）、北は藤原宮北面中門SB1900付近まで確認されており（第18次、『藤原概報6』）、藤原宮造営の資材運搬や排水を目的として掘削されたと考えられる。これから枝分かれするSD10801Aや、SX10820も資材搬入などに関わる機能を持つ遺構と推測される。

②SD1901A・SD10801Aを埋める。その後、南門・回廊以北一帯を整地し（整地層2）、南門を迂回するように、斜行溝・南北大溝SD10801Bを掘削する。そして、南門の掘込地業をおこなう。南門の直下にあたる場所は、SD1901Aを埋め立てる時に堆積土を浚渫し、埋土を互層に入れて丁寧に地盤が固められていた。掘込地業版築から基壇版築までは、一連で施工が進んだとみられる。

③SX10820を埋める。そしてSD10801Bの回廊建設地以北を埋め、東西大溝SD10881（および東西溝SD10882）に付け替える。また大土坑SK10883を掘削する。これらは、回廊造営の開始を契機とする遺構と推定される。ただし、先行して埋め立てられた回廊建設地以北の

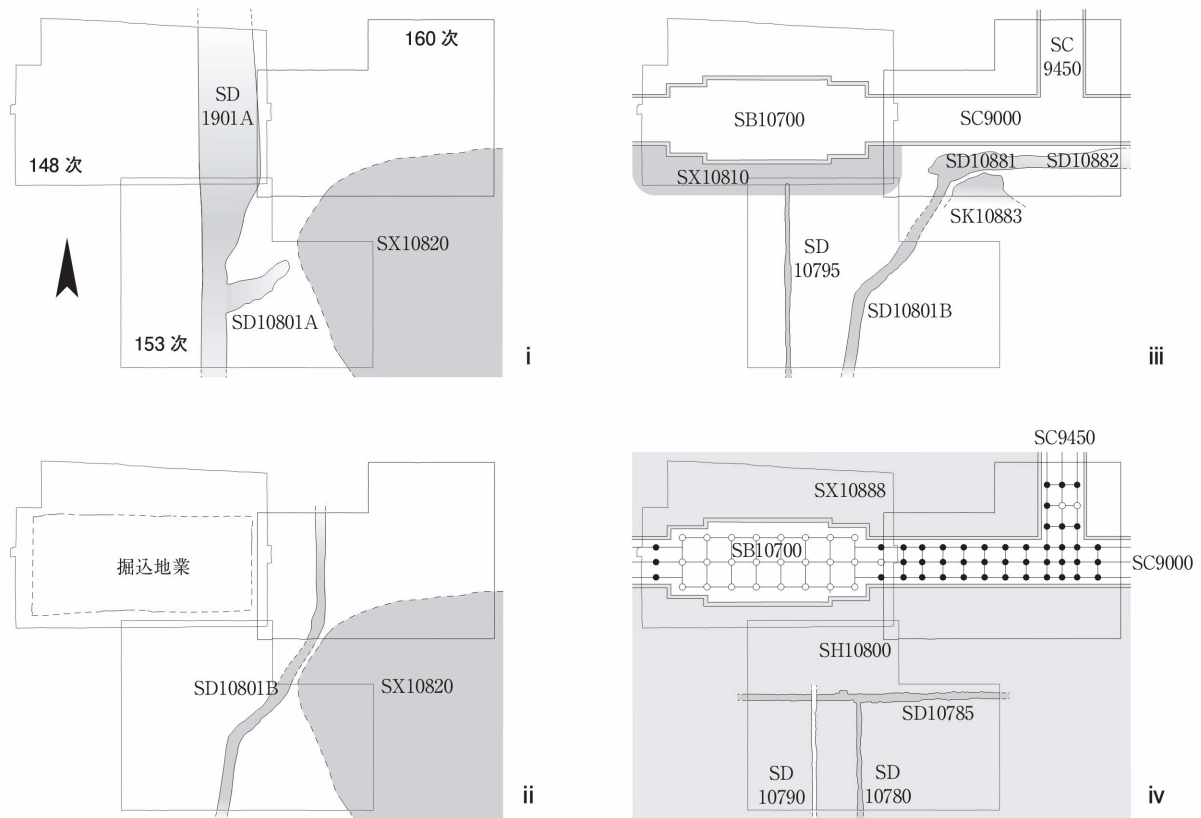


図125 藤原宮造営期の遺構変遷図 1:1500

SD10801Bと、付け替え後のSD10801B・SD10881の最終的な埋土(橙褐色粗砂・褐色砂質土)が一連であることから、これらを埋めた後、回廊基壇が築成された。

この間、南門の造営が進行し、朝堂院朝庭の南門基壇南面部は、朝庭中央部より一段高く造成する(SX10810)。この段から南へ向けて、南北溝SD10795が掘り込まれる。一時的な排水溝あるいは水準溝であると推定される。

④大極殿院内庭や朝堂院朝庭など広場一帯を整地する(整地層3)。大溝のように深く掘削された場所は、埋土が沈下しやすく、その上層に整地土が厚く入れられる。

⑤朝堂院朝庭部に、石詰暗渠SD10780・SD10785を設ける。SD10785は、初め素掘溝として機能し、その後石を詰めて暗渠とする。

⑥大極殿院内庭・朝堂院朝庭に礫を敷く。朝庭部に南門から南へ延びる通路状施設の東側溝と推定される、南北溝SD10790を造り、礫敷広場SH10800が完成する。

以上、①は、i. 藤原宮造営資材の搬入、②は、ii. 南門造営の開始、③は、iii. 回廊造営の開始、④～⑥は、iv. 内庭や朝庭空間の整備の各造営段階とみることができよう(図125)。年代は、運河SD1901Aから出土した木簡より(第20次、『藤原概報8』)、SD1901Aが天武末年頃には機能していたと考えられるほか、具体的な年代を示す材料は現在のところなく、今後の調査課題である。

6 まとめ

回廊 大極殿院回廊・朝堂院回廊を推定位置で検出した。両回廊はともに柱間寸法が桁行約4.2m(14尺)、梁行約3m(10尺)で、これまでの知見を追認した。また、大極殿院回廊の東南隅(大極殿院回廊と朝堂院回廊の接続部)の柱間寸法は、桁行・梁行とも約3m(10尺)となり朝堂院回廊隅部と同様であることがわかった。さらに基壇外装抜取溝の心々間距離は両回廊とも約8.4m(28尺)と等しい。したがって、大極殿院回廊と朝堂院回廊が、同規模の複廊であることを確認した。

宮中枢部の造営過程 第153次調査で検出した斜行溝SD10801Bが北へ延びること、またSD10801Bが回廊の南で東西大溝SD10881へと付け替えられることが判明した。南門や回廊の建設の時に、建設地を避けるように、資材運搬や排水のための大溝の進路を変更したと考えられる。このように藤原宮造営資材の搬入、大極殿院南門造営の開始、回廊造営の開始、内庭や朝庭空間の整備という、大極殿院南門周辺における一連の造営過程が、遺構変遷の上からより具体的にあきらかになった。いっぽう、沼状遺構SX10820や大土坑SK10883の性格は、あきらかにするに至らず、今後の調査を継続する中で解明されることが望まれる。(高橋)